**笹舟**

**大柴晏清**

 砂利道を娘が少し遅れて歩いて来る。

　（どうした？）

　振り返っても彼女は頭を下げたまま前方の父を見ようとしない。下の男の子が父の脇で立ち止まった。

　（いいの！）

　突っけんどんに言ってから娘はうつ向いて足を止める。

　植え込みで百日紅の赤い花が燃えるように咲いている。緑の濃くなった雑木が初夏の陽を浴びて白く光っている。青空が深い。

　自宅近くからタクシーで新宿御苑へやって来た。今日の休日は、こんな予定はでは無かったが、家内が病院に入院しているので気晴らしに父は二人の子供と公園へ遊びに行こうと考えたのだ。無論、子供達には母の病気は何なのか教えていない。店と二人の面倒見でここ、父はてんやわんやだった。娘は小学２年生、男の子は幼稚園年少組、帰って来たのは午後１時頃。

　タクシーから降りる時、父は１万札を出して運転手に叱られた。６３０円で大きなお札は迂闊だったが、運転手の物言いが気に入らなかった。腹に据えかねて二言三言やり返してしまった。二人の子供は父の横の座席で、その一部始終をジッと黙って聞いていた。いやだなー、そう思ったに違いない。ムキにならずに、近くのお店にでも両替に走ったほうが得策だった。沈んだ子供達の顔を眺めると、実に済まない気持ちに襲われる。

　そのまま子供達を促して御苑に入ったが先程までの楽しい気分が一辺に吹き飛んでしまった。二人の横顔が悲しみを帯びている、父親は途方に暮れる。詰まらぬものを見せてしまったという後悔が迫る。下の方の男の子は、それでも父と並んで歩いたが娘の方は２、３メートル後ろから付いてくる。その距離は父を無言で非難しているような長さにも思えた。

　砂利を敷き詰めた入口の遊歩道からは葉桜になった並木が続く。新緑の息吹が風の吹く中へこぼれている。

　（ごめん・・・な）

　父は振り返りながら娘へ声をかけた。謝るに越したことはない。娘の足が早まる。ホッとした父は男の子の手を握って歩く。桜並木の向こうには目にも鮮やかな緑の芝生が広がって、その上で家族連れや若いカップルが三々五々座るのが見える。輪になって踊る高齢者グループもある。その光景は、先ほどの父の伝法な気分を充分忘れさせるような平安な絵画でもあった。何年か前に興味を引いたスーラの（グランド・ジャット島の日曜日の午後）の景色。

　（よおーし、あそこの木まで走りっこだ！）

　ここから１００メートル以上ありそうな一本の大木を指さして父は宣言する。以前、あの大木の周りで家族４人でバレーボールやサッカーで遊んだことが何度かあった。

　（うん、いいよ）

　男の子が頷きながら小さく返事をする。娘は手をブラブラさせながら賛成とも反対ともつかない様子を示している。

　（いくぞー、よーい・・・ドン）

　大声を上げた父は先頭で走り出す。男の子が転げるように芝生の上を走り始めた。父はスピードを緩めて男の子を先にやる。娘が

　（待ってー、待ってーよ・・・）

　叫びながら走り出す。３人が追いつ追われつ、一直線に並ぶ。その内、先頭の男の子が芝生の上ですってんコロリンと転がる。あわてて駆け寄ると、泣き出しそうなベソ顔だ。

　（だいじょうぶか・・・泣かない、泣かない・・・）

　声をかけると今にも涙が落ちてきそうな顔を我慢して手でさする。娘も追いついてハアハア息を切らしていた。

　（お父さん・・・苦しいから、止めよう・・・）

　娘の声も途切れ途切れである。父は男の子の脇へ座る。娘も座る。エヘヘと娘の照れ笑い。男の子も笑い出す。

　少し離れた芝生からヨチヨチ歩きの幼子が３人の方へやって来る。

　（こっち・・・こっち・・・）

　母親が手を叩いて呼び寄せる。幼子はその声で立ち止まりくるりと向きを変えて若い夫婦へ戻り始める。女の子のようだ。髪をおかっぱにした母親は女学生のような顔付きである。

　芝生からはかすかな草いきれがし空は深く澄み切って下方に入道雲が沸き立っていた。はるか前方にユラユラと陽炎が立ちのぼりビルの建物を幾重にもダブらせている。

　（お父さん、鯉を見に行こうよ）

　暫く休んでから娘が言う。

　（そうだなー　行く？）

　男の子に確かめて３人は立ち上がる。近くまでやって来ていた鳩の群れが一斉に飛び立つ。カラスの黒だけが芝生を突っいていた。

　日本庭園に通ずる遊歩道の周囲は樫やブナの大木がうっそうと濃い茂みを創っている、青黒い緑のトンネルであるその中に白い花が可憐んな風情でひっそりと咲いている。台湾閣の建物へ回ると、ひんやりした空気が漂って遊歩道は少しぬかっていた。笹薮が多い。熊笹とは種類が違う幅の狭い細長い、すーとした笹である。

　（ちょっと、待ってご覧・・・）

　父は笹の茂みから比較的長そうな葉を折り取った。

　（いいかい、これで船を作るよ・・・）

　２，３歩、先を歩いていた二人が戻る。父の手元を覗き込む。

　（ほーら、こうして・・・船が出来上がる・・・お父さんが子供頃、こうして笹の舟を作って川で競争したもんだ・・・）

　笹舟は簡単である。両端を折って指先で二つづつ切り目を作る、右の切り目に左の切り目を差し込む、これで仕上がりだ。

　（ね、出来ただろ・・・）

　小さな笹舟を娘の開いた手に載せる。娘は感心したような面持ちで手のひらの笹舟をためつすがめつ眺めている。男の子も顔を近付けて見入っている。鯉の見学はどこかに置き忘れている３人。

　（ねえ、ねえ・・・お父さん、作りたい、教えて、教えて）

　手のひらの笹舟を父へ返しながら娘が口をとんがらせるなるべく大きな笹を取るように言うと、二人は遊歩道から奥の方へ入った。笹の葉は上手く取れないらしい。

　（下の方へ引っ張るんだよ・むしり取るんだ・・・）

　父が教えてようやく一枚二枚を取ることができた。見事な笹である。先ほど作った笹舟を崩す。それから、

　（こうして折る、次はこう、その次はこう、右の折り目を左の方へ入れる、そうそう、それで完成だ、後ろの方も同じようにやる、ここが短いとダメだよ・切れ目をうまく作ってね）

　二人が小さな指先で順序良く作り始める、器用なものだ父が案ずるよりはるかに覚えがいい。

　（これでいい？）

　娘の舟が先に出来上がる、少し遅れて男の子、彼の笹舟は太目な船に仕上がったが、ぶ格好、両端の折り込みを大きく取ったせいである。もう一枚の葉を使って再度、やり直す。父が手助けしようとするとくるりと向きを変えて自分で作りたい様子だ。男の子の笹舟二艘、娘が一艘、父の船が二艘、それぞれが手のひらに載せて池の方へ急ぐ。

　木々を映した池は静かに澱んでいた。向こう側の斜面の芝生は目の覚めるような緑で、その緑の中に白やピンクの形のいいツツジが輪になって植え込まれている。上にある東屋には、その景色を見学している何人かの姿もある。池の端の方には墨絵に描かれるような枯れ木の大木が立っている。

　（浮かべてみる？）

　池の入口の小さな橋の上で流れを見つけた男の子が父へ向かって聞く。手前の岸辺に移動する３人。

　（そうっと、浮かべてごらん）

　男の子が屈み込むようにして水の上に置く。船は流れに沿ってすーと糸を引くように滑り出す。続いて娘も手のひらの笹舟を流れに委ねる。こちらはくるくるっと回転してから先方の笹舟に追いついて走る。

　（やったあー）

　てを叩いて喜ぶ娘。

　（わあーい）

　小さな歓声を上げる息子。

　父も負けじと後を追って船を放つ。鏡のような水面を３艘の船が岸辺から離れて池の真ん中へ緩やかに走って行く

真上に照り付けた陽の光で湖面がキラキラ光る、そのせいで３艘を見失ってしまった。

　（よーし、向こうへ行くぞ）

　３人は池の真ん中へ突きこんだ陸地へ向かう。

（おおー、ほら、ここに成子の船があるぞー）

　男の子が娘の名前を呼び捨てにして指を指す。

　（一郎ちゃんのは、どれだっけ？あれ、おとうさんの？）

　男の子は手前に近付いた１艘を指さして娘に教えている

池の中には幾つもの流れがあるのだろうか、父の船だけが岸辺から遠く離れて浮かんでいた。その内二人の船も岸から離れて再び中央へ向かう。まるでアメンボウのように走っていった。餌と勘違いした数匹の鯉が口先で笹舟を突っつく。それでも３艘の船を転覆もせず湖面を上手く滑っている。子供の両手にもなる緋鯉や黒い鯉が水の中をゆうゆうと泳いでいる。３艘は到頭、向こう岸の窪みに隠れてしまった。追うことの出来ない岸辺である。

　（ざんねん、だね）

　自分自身を慰めるように娘がポツリという。だが、声は弾んでいる。男の子も満足した顔付きである。鯉の見学も出来たし笹舟を作って遊ぶことも出来た、父も安らぎを覚えている。

　父には小学校の頃、家の近くの大川の河原で子供仲間で競い合った笹舟の記憶が甦ってきた。流れの速い浅瀬を笹舟と一緒に走ったふる里の思い出、船の底に松ヤニを塗って、何時も勝ちばかりの上級生の顔や数人の仲間の姿が父の頭を走り去った。

　（家に帰ってまた、作ろう）

　娘が男の子に囁いていた。３人で再び茂みにある笹の葉を何枚も取りに行く。

　（笹の葉が、枯れてしまうから洗面器に水を入れて浮かべておくんだよ）

　家に帰って父はそう教える。ガランとした家の中は寂しい。子供等の母はまだ、どのくらい入院しているのか見当がつかない。乳ガン、という言葉を口に出すのさえ恐ろしい。二人が吸い付いた乳首の片方が失われた。元気でさえあればそれでいい、父はそう願ってている。

　娘が夕飯の支度に取り掛かる。母の留守を健気に守ろうとする娘がいじらしい。弟を指図してテーブルへ父のビールを運ばせる。豆腐や枝豆を皿に盛る、父はご飯や味噌汁の加減を一緒に見てあげる。テレビのお笑い番組に３人の笑い声が弾ける。

　明日からまた、慌ただしい日がやって来る、毎日の午後の病院行きと子供達の世話だ。連絡帳をこしらえて父と子等はお互いが意思を通わせている。

　（かみさま、お母さんがはやく、なおりますように）

　娘のたどたどしい文字に父の目に涙が滲む。男の平仮名が躍る。

　（げんきで）

　翌朝、玄関に置いてある洗面器の中に笹舟が２っ、浮かんでいた。二人の子供の祈りを乗せた希望の笹舟、である